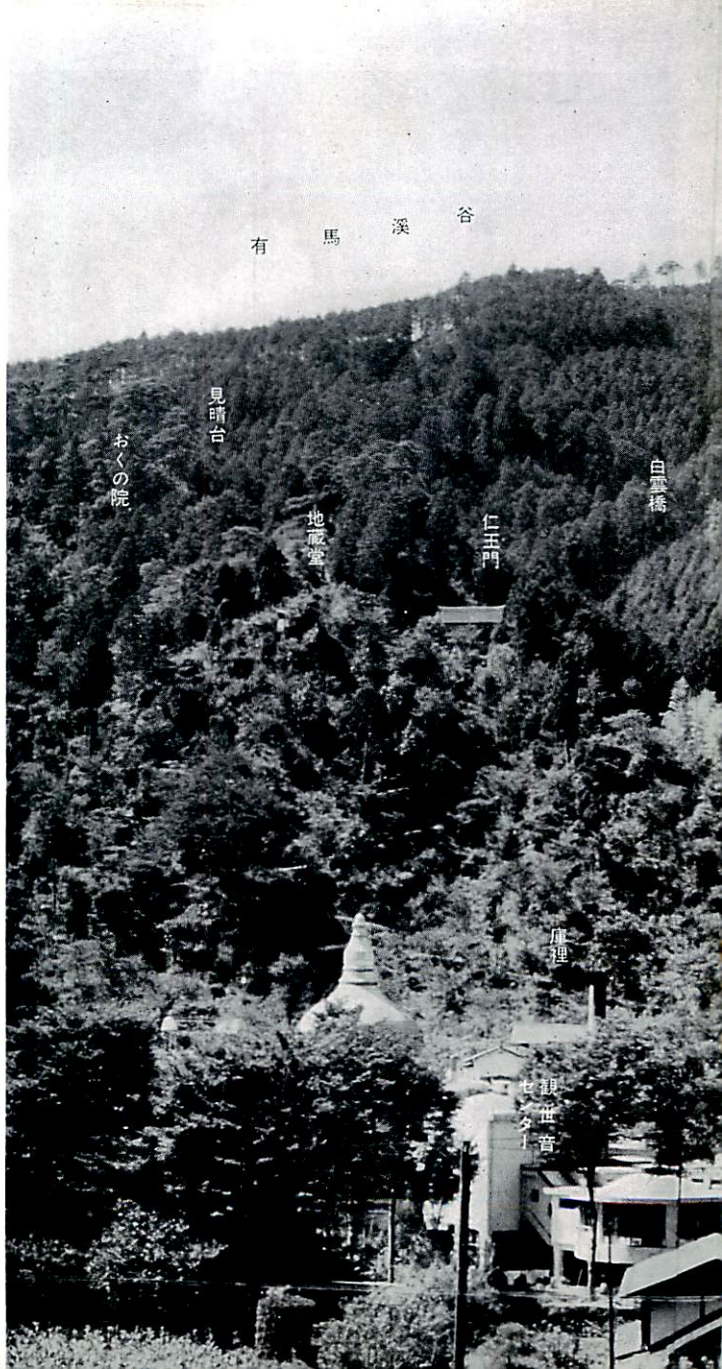


白雲山 鳥居觀音のしおり 7

七月一日発行



玉華門

勅賜孫師
曹洞宗長
九十三階仙下

故 高階瓏仙猊下御染筆の玉華門扁額

仏教界の最高峰であり、曹洞宗の管長であられた、高階瓏仙猊下には、この一月十九日、九十三才を以て御遷化なされた事は、誠に仏教界のため大きな損失であります。

猊下と鳥居観音との御縁は、甚だ深いものがありまして、各観音の開眼式や、各落慶式の御導師を始め、実に長年にわたり色々と御指導に預っております。

現在建設中の支那門は、猊下が玉華門と命名されて、其の扁額の字を御染筆下さいましたのは、昨年の十二月下旬で、今年一月にはこの額が出来たら見たいと楽しみにして居られたのにと心残りが致します。

この玉華門は猊下の御絶筆となりました。

合掌

静粛に通夜の本堂底冷えす
御柩哭いて見送る道寒し
侍者もなく終の御旅寒からむ

アラブ・地中海沿岸の旅路 (其ノ二) 桐 江

イスラエル

イスラエルは、広さは四国の半分位で人口二百万という、小さな国で二十年前に独立したばかりです。

始祖はアブラハムで、ソロモン時代までは強大な国でしたが、アツシリアやバビロニヤに侵略されて、その為国民の大部分は奴隷として連れ去られました。

イエス・キリストもユダヤ人で、ユダヤ教と同じく唯一神教を布教したのですが、信者が漸次増加して、ユダヤ教と相入れない面が出て来たので、ユダヤ教徒は、イエス・キリストをなきものにしようとなりました。当時イスラエルは、ギリシヤの統治国であったので之を扇動して、遂にイエス・キリストを磔の刑に処したのです。

そのためキリスト教徒は、ユダヤ教を悪魔とし迫害し、東ローマ帝国の建設により、遂にイスラエル国は壊滅し、ユダヤ人は世界中に四散して流浪の民となったのです。

彼等は、神を信じ国家再建を夢みつつ、がしんしょうたん臥薪嘗胆の苦しみと努力により、世界各国で経済界及び政界で大きな勢力を持つようになったが、その為「ジュー」といわれ、軽蔑されるようになりました。

そして、ヒットラーがドイツに居た、六百余万人のユダヤ人を、一瞬にして惨殺するという空前の悲劇が起ったことは、ソビエトでも同じようなことがあって二千八百万といはれたユダヤ民族は、一千二百万人に減少してしまつたのです。

ところが、第二次世界大戦後国連によりイスラエルが再建せられ、二千余年の間祈りつづけて来たその夢は、遂に実現されたのであります。

そして世界各国にいるユダヤ人が、だん／＼帰国して人口も漸次増加しているのですが、言葉が通ぜず、之をヘブライ語に統一するため非常な努力をしています。

私の泊っていたホテルの従業員も、三十数ヶ国から集まっているとの事でした。

また、帰国して来る人のための、団地の建設もすさまじいものです。

しかし、この資金は、ドイツの賠償金と世界各国にいる、ユダヤ人からの送金によるとの事です。

イスラエルは、今でもヘブライ暦を採用していて、今年には紀元五千七百二十五年だといっております。

その紀元は、伝説のアダムとイブだといっておりますから、はなはだあやしいものですが、ユダヤ人は、これを堅く信じて、今でもヘブライ暦を守っているのに対し、日本人が、わが国の紀元について批判がはなはだしいのは、妙に感じられます。

イスラエルの敵は、「砂漠と無学」であるという合言葉で、これと戦ったため、この二十年間に砂漠が漸次立派に緑化しているのには、驚ろきました。

首都テルアビブの南方を、視察しましたが、三千年前の遺跡の発掘されたものや、ナボレオンがエジプト遠征の折、熱病にかかり三か月ぐらい養生した所とか沢山の遺跡が見られました。

この国には、キブツ（集団農・工場）が数千もあり人口の二分の一は、このキブツに属しているとの事です。その一つを見物しました。総て共産的経営であるが、その施設が、実によく整っているのには、感心し

ました。

このようにキブツが発達したのは、砂漠を開拓して沃野にすることと、他民族の侵略に備へるための、屯田兵の組織になつてゐるからとの事です。

三 大宗教の聖地 エルサレム

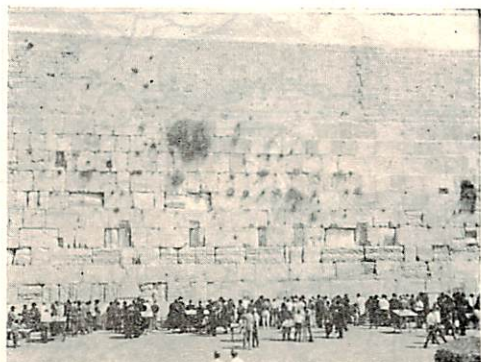
十月四日、立派な緑野を通ること一時間で、三大宗教の聖地「エルサレム」に着きます。

この聖地には、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の三大宗教が、大きな城壁にかこまれた中に居るのは全く不思議な聖地とも云ふべきでしょう。

ユダヤ教の嘆の壁

その西門より中に入ると、昔の寺院の一部と思はれる、嘆の壁という高い石垣があります。

二千年來接近することの出来なかつた嘆の壁、ここには、ユダヤの神が今もいると信じ、この壁を撫でさすりしながら、「神よここに止まり給え、そして吾々をお守り下さい」と真剣に祈りつつ涙をながしている有様を見ると、異様な謹厳な感に打たれて、この気の毒な人種に対し、そぞろあわれを感じました。そして私達も、丸い小さな帽子をかぶせられて、壁のところ、



ユダヤ教の嘆の壁（エルサレム）

お祈りをしました。ここでは、頭の毛を少女のように、編んでたらしめている男の姿が、珍らかったのです。これは、剃刀を使うなという戒をまもっているからなのです。

モハメットの入滅したイスラム教

この嘆きの壁を右に廻って昇ると嘆の壁の上に大きな岩を中心として建てられた回教の本山にふさわしい立派なモスク（回教寺院）があります。

この岩は、アブラハムが神のお告げにより、自分の子供を生贄にしようとした所で、この岩がてら／＼と光っているのは、何千万という巡礼者が撫でさすったためだとの事です。

右の方の石段を下ると、モハメットの死骸を納めた穴がありまして、岩の上の隙間から昇天したとか、色々の伝説のあるところですよ。

キリストの十字架

此の回教モスクの北方に行くと、イエス・キリスト最後の晩餐の室とか、苦悩の教会等色々の伝説の跡が見られます。殊にイエス・キリストが死の宣告を受けて、十字架を負はされて登った坂道や、処刑された岩山や、その岩の割れ目から血が岩を通して、地下室にあった骸骨の上におちたため、これが動いたので金網をかぶせてあるとか、死んで三日目によみがえり、色々の不思議な事が起った、などの伝説が沢山あります。が、キリスト教徒は、皆これを信じ、有難く思っているようでした。

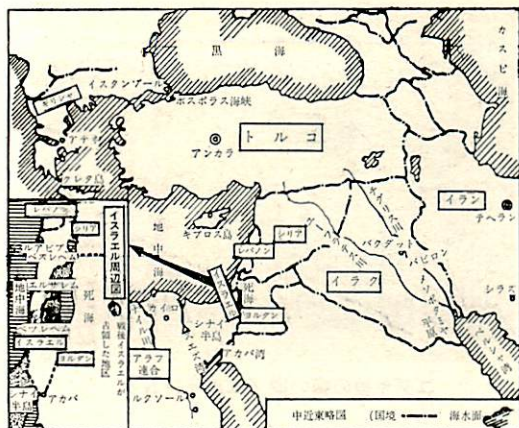
その右側に大きなキリスト教の寺院がありますが、内部の室は四分されて、キリスト教の四派が仲よく納まっておりましてのは、日本の仏教の宗派とは大分違っております。

面白いのは、ある一派の室内には、マリアの絵が沢山あるのに、ある一派には一つもないことです。これは信者がマリアを通じてキリストに願ふのと、直接キ

リストに祈るといふ、教義の差であるとのこと。このように、エルサレムのせまい城壁の中に、三大宗教が集まっている事は、何か不思議な力をもつ靈地であるという、印象を受けました。

中近東諸国の興亡

イラクの中央を流れている、チグリス川がペルシヤ湾にそそぐ流域に、メソポタミヤという豊穡な底い平原があります。



ここを中心として、五・六千年前に世界最古のシュメール文明が生れたことはイラクの博物館で見た、発掘品によって知ることが出来ます。

シュメール国家群は、バ

ビロニヤ其の他の国々の興亡や侵略をくりかへしたが、紀元前五百五十年頃、ペルシヤという大帝國が出来たことは、イランのベルセポリスの遺跡で述べた通りです。

アレキサンダー大王

しかし、今度の旅行で吾々を最も印象づけたのは、紀元前三百三十六年に現れた、アレキサンダー大王でありました。先づアラブ諸國を切りしたがえ、ペルシヤ大帝國をほろぼし、印度のインダス川まで進軍したのですが、ここで大王は、敵の矢を胸に受けて負傷したのと、恐ろしい雨期にあつて止むなく、軍隊を水陸に分けて帰國の途についたのですが、途中メソポタミヤで、マラリヤのため三十二才で死去しました。

彼の軍隊は、十余万の大軍のなかに商人、学者、文人、芸人、娼婦等を含み、さながら移動する大都市のようだったといわれております。

大王は、又都市造りも名人だったと見えて、かのシーザーとクレオパトラで名高い、ナイル河口のアレキサンドリヤ市を始め、アレキサンダーの名のついた都市を造つたが今でも数ヶ所其の名の都があります。

もし彼が帰國し得たら、ギリシヤは偉大な國になつ

たでしょうが……しかし、大王は、アフリカ大陸等を征服しようという、征服欲の強い放浪的英雄であったことは、ナポレオンとよく似た処があります。

王の死後、彼の部下の將軍達は、占領した地盤をわけて統治しておりました。

ギリシヤは、多神教であったため仏教を保護し、かのガンダーラの仏教興隆に寄与しておりまして、その仏像は、みな白人（ギリシヤ人）の顔で頭髪は波形をしており、印度の仏像と違い一頭二手という、ギリシヤ彫刻をとり入れているのが特長です。

侵略せる回教徒により顔をけずられた仏像



や仏像を破壊し、殊に蒙古は僧侶まで殺害したためガンダーラの大乗仏教は全く衰微してしまいました。

其の後、東ローマ帝国の支配や十字軍等色々な変遷がありました、蒙古の侵入が最も残酷なのを見る

と、もし元寇の乱で日本が負けていたら、日本民族は実に悲惨な事になっておったと思ひます。

このように中近東諸国には、内乱や侵略者に荒され、砂漠の中にうづもれた都市も多いとの事です。

そして、永い間白人の支配により骨抜きにされておりましたが、第二次世界大戦と石油の開発により漸次独立して、眠れる獅子も漸く目ざめてきておりますので、将来昔の文化を再現するのも遠くはないでしょう。

シルクロード

中近東は、東洋と西洋の物資交流の接点であるため、隊商（キャラバン）の歴史は実に古く、又中近東の文化も、その影響で発展したといえましょう。

しかし、シルクロードは、生きもののように荒れ狂う砂漠地帯を通ったり、盗賊の出没等隊商の苦難は大変なものがあり、その道筋には、ラクダの骸骨がところどころにがっているとのことです。

しかし、スエズ運河や道路の発達により、今はこのシルクロードも、昔の物語りとなっているようです。

イスラム教（回教）

アラブ人は、荒れ狂う砂漠と、たえまなき戦乱のた

め、人道は地に墜ち、すさまじくっております。
イスラム教の開祖モハメットは、西暦五百七十年にアラビアのメッカに生れました。

モハメットは、アラアを唯一絶対の神として、厳格な戒律をもって、すさまじくアラブ民族を教化指導し、漸次発展して、イスラム帝国も建設され、アラブ諸国だけで一億近い信者を得るまでに強化しました。

信徒は、一生に一度は必ず「聖地メッカ」に巡礼する掟となっておりますが、砂漠や盗賊のため非常な苦業であり、帰国できるのは、八〇%に過ぎないのとこのですが、途中で死んでも天国に行けるといふ、強い信仰心には驚ろきます。



モハメットが祭られている
モリヤの丘(エルサレム)

回教には、仏像のようなものは全くなく、何万というモスク(回教寺院)にある祭壇は、皆「聖地メッカ」の方向に造られていて、信者は、この祭壇に向ってお祈りします。

そして、信者は戒律を厳守し、一日に五回メッカに向ってお祈りをするのですが、自動車を止めても礼拝を始めるのには感心しました。又断食月というのがある、一か月の間、昼間は食事は勿論好きな煙草も止めて、お祈りしつづけているので、会社の事務は勿論工事なども、中止せねばならぬとこぼしております。

ナセルも、この非能率的な、断食月を排そうとしたこともありすが、全くうけつけられないほどの、狂信ぶりである点、印度教によく似ております。

日常の挨拶も、「今日は」とか「お早よう」とは云わず、「あなたの上にアラア(神の名)のお恵みがありますように」とか「絶対の神アラアをほめたたえん」などの一点ばりで、これでは意味がわからないのではなにか、定めし不便だろうと思ひます。

印度では、牛をわれ等の母とし、大切にしているように、イランでは、ペルシャ猫の本場だけに猫を神の使として大切にしております、町の処々に猫拾場として、深さ三米に十米四方ぐらいの穴があり、沢山の

猫が遊んでおり、これを奉仕的に世話している人がいるそうです。

又回教では、四人まで妻を持つことが出来ませんが、これには相当の資産が必要だし、また操縦もなかなか面倒があるようです。

遺跡では、観光客に対し、古い彫刻の破片を、監視の目をぬすんで、売っているのによく出会いますが、バビロンの遺跡でも三人ばかりの子供が、われわれの仲間の人を、木の間に連れこんで取引しており、そして、食堂の入口に老人がいて、この子供達を操縦しておりましたが、この老人の曰く、「おれは妻を三人持っている」と自慢しておりました。

しかし、昨今は、都市はビルが建ちならび、若い女性性は、チャドル（ベール）をかなぐり捨てて、膝上三センチのミニスカートで闊歩しており、新興国家の息吹が感じられますが、田舎はまだ昔のままのようです。「この若き女性も、年をとるとチャドルで、顔をかくすでしょう」とガイドは云っておりました。

私達が、現代都市的な、カイロを離れてナイル川にそって上流の奥地に行った時ですが、大男が小さな口バに乗ったり、荷物を積んだラクダを連れたり、沢山の女性がチャドルをかぶって、頭に壺をのせて歩いた

りしていますし水を汲むのもつるべ式や、足で踏む水車を利用し、脱穀も水牛やラクダに踏ませているし、住家も乞食小屋の様で、土塀の上にやしの葉をならべてあるだけで、自動車も背広服も電気も見られない。又小供が頭にかごをのせてロボ等の糞をひろって居るのを目のあたり見ますと数千年前の原始時代の中をさまよって居る様なしかし気の毒な感も致しました。

アラブとイスラエルの戦争

祖国を失って、二千年の間、世界中を放浪していたユダヤ民族も、第二次世界大戦後国連のお陰で、小さなイスラエルとして独立することが出来たのですが、東側のヨルダン国との境界線は、朝鮮の三十八度線のように、非常な無理があり、その為、聖地エルサレムの市街地は、二十米ぐらいの間で両国兵が睨み合っておりまして、イスラエル人は、目の前にあるユダヤの聖地「嘆きの壁」にもお詣りすることが出来ず、其の他の境界線も入り込んでいますので、イスラエルの女子軍人がドライブをしていて、ヨルダン国の捕虜になったといふ話も聞きました。又砂漠地帯で最も大切な、水利の面でも摩擦がたえない有様で、戦争の原因となるべきものは、沢山あったようです。

ナセルがイスラエルの大事な海峡の入口を封鎖した



イスラエルの侵入により新しくヨルダンとの国境となったヨルダン川

時間に攻撃して来るとは、もつてのほかだ」と憤慨していたが、僅か二百万のイスラエルが、一億のアラブ諸国を相手に戦ふという事から、日本の真珠湾の奇襲攻撃等を秘密に研究したり、女子も皆軍事訓練を受けて、機をねらっていたのです。私達がイスラエルに着いた時は、丁度正月の元旦でしたが、少しもお正月気分がしないほど緊張しておりました。イスラエルの北方のレバノン国の如きは、軍用機は二機しかなかった

ため、イスラ

エル軍は、東

はヨルダン領

に侵入してヨ

ルダン川まで

と、南はシナ

イ半島をスエ

ズ運河まで占

領してしまっ

たのです。

アラブ人は「習慣になっ

ので、一寸たたかされると、すぐ単独でイスラエルに、降参してしまつたとの事です。

私達は許可を得たので、占領したヨルダンの砂漠の中を自動車で、ヨルダン川まで行く事が出来ました。

途中、トーチカ、鉄条網等が爆撃でめちやくちやくに破壊され、こわれた戦車も五・六台道端にころがって

いました。ヨルダン領だった、占領地区は砂漠ですから、戦車等も、全くかくれる所がないのです。

検問所も無事に通ることが出来、ジエリコという世界最古の町の発

掘された跡や、神が塩水を真水

に変えたという伝説のあるオアシス等を見物し

て、川巾はせま

いが水量の多い

ヨルダン川につ

きますと、キリストがヨハネから洗礼を受けたという霊地が河



イスラレエ軍により破壊されたヨルダンの戦車

岸にあります。そして其の近くには偽装された兵舎があり、イスラエル兵が数名おりましたが、訪れる人もない前線に、日本人殊に一行中に、二十才の女性がおられたので、非常によくこんで写真等を写して面白がっておりましたが、川向ふで、ヨルダン兵が睨んでいることを思つて、あとでぞーっとしました。

それから、少し後もどりして山を登つてゆくと、立札が立つていて、「ここは海面と同じ高さで、四百米下ると死海に達す」と書いてありました。若し海水が流れ込んだら、ヨルダン国の半分は、水没してしまふでしょう。

この山を下ると死海に達します、湖岸にはレストランがありますが、底地なので四十度を越す暑さでした。

死海は琵琶湖の数倍あると思



死海で泳ぐ同行の人達

われる大きな湖水で、向ふ側にはヨルダンの山々が見えます。塩の含有量は、アメリカのソート・レーキぐらいですが、色々の物質を含んでいると見えて一寸なめても、強力な刺激のある恐ろしい水質です。

われわれの仲間七人が、海水着を持参しておられ、死海で泳がれましたが、体が浮いてしまふぐらいの濃度で、周囲の景色も何となく隠惨なものでありました。

エジプトのカイロの飛行場は、高射砲や小銃等で物々しく又夜、町を見物に出ますと、ナイル河畔では土裏の陰で兵隊が向ふ側を睨んでおります。町角や大事な建物の入口は勿論、博物館の内部の重要美術品等には、皆土裏が積まれておりまして、ツタンカーメンの貴重な陳列室は、三室とも嚴重に閉ざされて見る事が出来ませんでした。

商店の硝子戸には、爆風よけの紙が張られており、殊に憎まれている米国系の商店は、鐵戸を下して閉店しているなど、戦時気分が満ち／＼ておりました。

夜、スフィンクスやピラミットを、背景とした光と声の野外劇を見物しましたが、荒涼たる砂漠のなかでピラミットとスフィンクスが、五色のライトに照し出されて、美しく浮び上り、音楽に合せて、五千年前からの歴史を物語るのを聞いていますと、恍惚として、

数千年前の昔に、帰ったような心境になりましたが、二度ばかり、スエズ運河の方面で、銃砲声が聞こえましたが、休戦状態中とはいえ、ピラミットを恍々と空中に浮び上がらせるとは、大胆な事のように考へられます。このような状況なので、私達も、相手国をほめることや、写真を写すにも、細心の注意をしなければならなかったのです。イスラエルは、ヨルダン領であった占領地に、どん／＼立派な道路を造り、又ブルトザーで、砂漠を開墾している有様を見たり、スエズ運河に期待を持っている事や、ユダヤ教の聖地「嘆きの壁」の事等を考へると、イスラエルは、その占領地を返す考へは、ないように見えます。又アラブは、国々によって利害が違うので、歩調が合わず、ナセルの意図通りにはならないようですが、宗教上から、イスラエルを憎んでいるのは、実に深いものがあり、互に戦備の充実に、おおわらはであります。

私が、日本に帰ってからも、小競合等の険悪な空気が、テレビ等で度々報道されているのを見ますと、今や、中近東は、ベトナムに次ぐ世界の関心のまとなっているように思はれます。

(次号には、トルコと地中海の伝説の多い国々の事を書いて見ます。)



観音信仰に就て

鳥居観音にて講演中の山口平八先生

(山口平八先生講演録音より)

只今御紹介いただきました山口です。昨日から今日と二日間にわたって、鳥居観音本堂の増築が出来たことと、千手観音の開眼式が執行されて、私に観音さまのお話をするようにとのご依頼をうけたので、まかりしました。これから一時間ばかりはなしたいと思います。

信仰と云うことは、ご利益を受けると云うことで、観音様を知れば知る程ご利益は多くうけられるわけです。ですから観音様の話は私が本当にやれば五時間位なければ、はなしきれない程知っています。

そもそも観音と云う名称は、印度にはじまり、支那で漢訳され、日本で訳されたもので、古い訳を旧訳、新しい訳を新訳と云います。

これから参詣する人がおありと思いますが、鳥居観音の上のお山に三蔵塔があります。ほんとうは女装三蔵塔と云うのです。その中に三蔵さんのお骨が納めてあるのですが、これは日本でもまれな、靈骨塔で世界

に三つしかありません。こちらがその一つです。

ですから皆さんも本気で拝まなければいけません。

今から遠く奈良時代に、三藏さんは新訳したのです。

漢訳は観世音又は観自在、光世音とも云っています。

何れにしても、新しく訳したものです。

観は見る、音はおと、一切の人間全体をよく見て自由に救ってくださる、それが観音様です。

真面目の者は救い、不真面目の者は救わない、つまりよく観察しているから自由にそれが出来るわけです。

観音様はいくつもあります。唐の、道すい、と云う坊さんが多くの観音の中から引ぬいて、六観音としたのですが平沼先生は、七観音をこのご本堂に納められたのです。

その観音の一つは聖観音といます。お札の中にある聖徳太子の聖です。秩父地方には正観音と書かれたのがあります。文部省では聖観音と書いています。

観音は大慈悲心の体現者とされ、あらゆる形の苦難から人々を救うお力をもっていて、その救済のために三十三の化身を現わして法を説くと云われています。

当時お経があつて、その後観音様が出来たのです。

今から千四百年前、印度に聖観音がきざまれました。

大乘經典中で、この観音菩薩のことをくわしく説い

て、その功德を賞賛しているのは法華経です。その中

の観世音菩薩普門品は、通例観音経の名で呼ばれて現

在日本で、もつとも親しまれている經典の一つです。

聖観音はどう云う形かと云うと、施無畏、即ち物を施

す慈悲の姿で、右手が慈、左手が悲を現わしている、

そしておそれなきものを施すと云うのです。

聖観音で左の手に、びんをもっているのがあるが、

その、びんの中には香水がはいっていて、いやらしい

男が近よったら、その香水をふりかけて、いやな匂い

をけすのです。平沼先生は先ず第一にこの聖観音をお

ほりになりました。

次に十一面観音ですが、千三百年五十年前にこのお

経が出来ました。お顔の上に十一の顔があつて、前の

三つは慈悲の想、左三つがいかっている想、右は、き

歯をむき出した想、後の一つが笑っている想、そして

頭上のは仏面想と云つて仏様の想をしているのです。

皆さん、人間は一日のうちに、こう云う想をするこ

とをお考えになったことがありますか？

何か気に入らないことがあるといかります。その時

の想、けんかをしてき歯をむき出した想、又人をあざ

けり笑う想、しかし人間よ、考えよ、二十四時間の中

のそれは、まよいである。それをすてて、仏のように

なれよと、さとしていらっしやるのです。これは沢田先生がおほりになりました。

その三は不空羅索観音です。この観音は千手観音につぐ大作であります。

汝のねがいはいむなしからずとして、この観音は眼が三つ手が八本で（三眼八臂の像）その中の一本の手がつなをもっている。このつなを投げてやるからつかまうてこいよ、このつなが大事なのです。そして、あらゆる人間につなをお投げになって救ってくださるのです。千二百年前、天平時代のもので、その仏像の図で名高いのが奈良にあります。

つぎに馬頭観音ですが、此の宗教はお釈迦様より前にありました。この観音だけは、いかりの想をしていて、頭の上に馬の顔があつて、飢えた馬が枯草までも食いつくすと云ふ想で、これは人間の慾望を食いつくしてくれろと云う救いの意味で現らわされたものです。

千二百年前のもので、その辺にある馬頭のしるしのもとは意味がちがいます。

さてその次ぎは、今日開眼された、千手観世音です。掌に目が一つづつ書かれていて、その一つの眼が二十五の働きをすると云われています。ご仏体の左右に二十本づつ手が出ていますが全部で四十本ありますから

千手千眼あるわけで、お経は、千手千眼だらにしんじゆ経、と云います。一千の眼をもつて、我々を見とどけ、千の手をもつて人類を救ってくださるのです。

ところが千年前平安朝時代に、弘法大師によって、千手観世音がつくられました。そして千手観世音は、蓮華王とも云われます。京都の三十三間堂の中に、左半分に五百、右半分に五百、中央に座した千手観音があります。本当の名を蓮華王院と云つて、又の名が三十三間堂なのです。

私も観音信者で自分の書齋に観音様をかざっておきますが、政治がきらいだから政治家になるつもりはないけれど、政治家以上の働きをもっています。

あの女と散歩したいなアと思えばその女がきつと来るんだからね、しかし、さどっているから手を引っぱるようなことはいたしません。

酒がほしいなアと思えばそれこそ、特級酒が届いてくるし、ネクタイが買いたいと思えば三越のマークのはいった、すばらしいのが来るんです。

この間テレビで放送した時に、友人が

「君、実にあの放送の時はよかったな」と云うんで

「あの時の話がか」と問い返したら

「ネクタイがよかったよ」

友人のやつ大変ネクタイをほめていました。

これも皆観音力だからたまりません。

さて第六番目が准胝観世音です。観音様は全部男性ですが心は女のようにやさしいのです。ただこの観音だけが女性です。仏母観音とも云いますが、これからお母さんになる人はこの観音をおがまなくてははいけません。そして女は清くなければいけません、子供をもつた母、これからもつ母、清らかな神に等しいことこそ一番えらいのです。昔から、偉人の母はみな仏母観音のような母だったので。

最後に如意輪観世音ですが、六臂の像です。

あぐらをかいているのが特徴のようです。如意輪観世音は読んで字の如く何事も意の如くなると云うことで、結婚を目の前に控えている女性は、この観音を拝めば望みをかなえてくれるし、お産をするお母さんは安産出来る、その他、ねがいごとをかなえてくださると云う観音です……。

以上いそがしく話しましたが、平沼先生がこのような立派な七観音を完成され、ここに式典が執行されましたことは、何ものにもかえがたいおよろこびと思えます。そう云う意味でどうぞ皆様ぜひ観音様をしつかりおがんでください。

(終り)

西遊記(其ノ二)

(二) 石猿の旅

「いいとも、こちらから迎えに来たくらいだ、つれて行く、すぐおいで」

子供は、あるきながら、木の根、岩かどを身がるに飛びながら云った。

「お師匠様は、乱ぼうが大きらいだ、会ったら、おとなしくしなくちゃだめだよ。」

おとなしくついていくと、山は高くなり、木の茂りは一そうふかくなって、あたりはうす暗く、足元もはつきりと見えなくなった。その時何処からかやさしい笛の音が聞こえて来た。つよく、やさしく、それは身も心も、すがすがしくなるような音であった。

「あの笛の音は？」と王様猿がたずねた。

「お師匠様がふいていらつしやるのだ、もうじきだ、ほら、あそこに。」

子供が向こうを指さし時、笛の音は、止まった、空の中につき立った大岩の上に、菩提祖師の尊い姿が見えたのである。

「よくまいった。」

そのやさしい声に王様猿は立ち止って、うやうやしくおじぎをした。

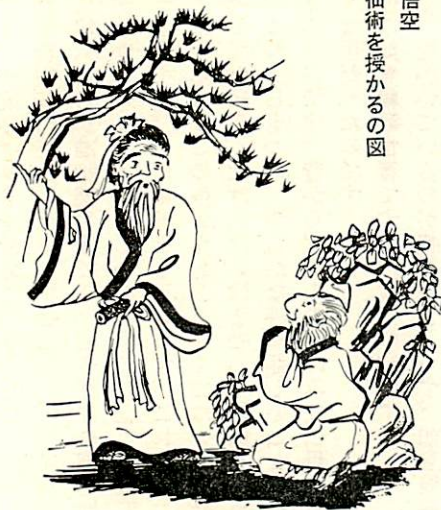
「祖師様はじめて、お目にかかります、おねがいがあるつて水れん洞からきた者です。」

「わかっている、教えてやるう、だが、今すぐと云うわけにはいかぬ、しばらくここにいろがいい、そのうちに、きつと教えてやる。」

「ありがとうございます、不老長生の術をさずけていただけぬなら、何でもがまんします。」

孫悟空

仙術を授かるの図



(三) 飛行の術

王様猿は、その日から、仙術の修業をはじめた、朝は兄弟子達に、早くからおこされ、水をくんでこい、薪をとってこい、などと追い使われて、休むひまもない。それから食事の仕度、畑に出て作物をつくるなど誰よりも働いた。

王様猿は時々、つらいと思う事があったけれど、こらえにこらえていた、そんな時祖師は、じつと王様猿の目を見て、云ってきかせた。

「正しい心を養いしつかりした暮しの出来ない者に、仙術は教えられない、お前が仙術を学びたいなら、先ず心と体をきたえることだ、それが修業だ。」

王様猿はそれをきいて、一生けんめいがんばった。学問、礼法、道の話などを、兄弟子達と共にきいた。

それから七年も経たある日、祖師は王様猿を呼んで、その顔をじつと見つめながら云うのであった。

「長い間、よく働いてくれた、これでようやく修業はすんだ、いよいよ仙術を教える時が来たが、その術にも色々ある。お前が知りたいのは何か?。」

「はいただ一つ、不老長生の術です。」

「これこれ、ぜいたくを申すな。」

何を考えたか、祖師は、いきなりどなりながら、猿の頭をうって、さつさと、奥へ行ってしまった。

去って行った祖師を、おそるおそる見送った猿は、「わかった。」と一人にっこりとわらうてうなずいた。

「どうした、しかられて笑っているやつがあるか。」

兄弟子達は、不思議そうに聞くのであるが、王様猿は、だまって首を振るのみである。

その晩おそく、祖師のねてる部屋へしのび込み、枕元へつっ立った、黒いかげがある。

「誰だ。」

祖師は起き上って、声をあらくしてとがめた。

「わたしです。こいと云うことなので、お約束通り、伺ったのです。」

「おお、お前は猿か、何をしに来たのか」

「はいお師匠様は、今日、わたしを、むちで三度おたきになりました。あれは三更（夜の十二時から二時まで）に、参れとのことと思いましたが、伺いました。」

「えらい、わたしの謎がわかったとは感心だ。」

祖師は膝を打って云った。

「お前の知りたいと云う不老長生の術、今授けてやるぞここへ参れ。」

部屋の方を指さして云った。

王様猿が云われたところに立つと、祖師は、頭上へ手をやって、なでながら、じゅもんをとなえた。

「これでよい、おまえはもう、年をとらぬ、死ぬこともない。」

「はい、ありがとうございます。」

お礼を云って、さげた頭をふいとあげると、まったく不思議、王様猿は、急に心が清々しくなると、体中に、生々とした力がみなぎってくるような気がした。

いつのまにか修業をした王様猿は、いろいろの仙術をおぼえ、そして、いつか七十一の仙術を習い込んでしまった。おまけに、祖師様から「孫悟空」と云う名をいただいた。

「孫悟空、いよいよ最後の術を教えてやろう。」

「えっ空を飛ぶ術、飛行の術ですね。」

孫悟空は、とび上ってよろこんだ。空をとぶ術、あの鳥のように自由自在に空をとべたなら、どんなにゆかいで、気もちがいいだろう、と思うと悟空の胸はおどり、顔は、よろこびにかがやいた。

「悟空は、こぶしを胸に当て、足を踏張り、深呼吸をしてさげんだ。」

「きんと雲よ、こい。」

たちまち、どこからともなく、すうっと雲がわいて

きて、悟空が足をかけると、ふんわりと空に舞い上って行った。西へと云えば西へ、東へと云えば東へ、心のままに飛ぶことが出来た。

「きんと雲は一飛十萬八千里だ、用のある時は、いつでも呼ぶがよいぞ。」

一里は、日本では、やく四キロ。中国では、その六分の二に相当する。

「はっ、ありがとうございます。」

悟空は、きんと雲にのって、たまらなく飛んでみたくなった。この雲にのれば、遠いと思っていたすいれん洞へも、じきにいけることに気がついた。

「お師匠様、わたしを花果山へかえらしていただきとうございます。」

「ほほう、一とびとんでみたくなったか、よしそれなら、かえるがよい、だが、云っておくことがある。仙術をわるいことにつかってはならないぞ、わかったかな。」

「はい、それはだいじょうぶです。では、ごめんください、きんと雲よ、こい。」

悟空は、きんと雲を呼んだ。

「行け、花果山へ、すいれん洞までとべ。」

悟空の言葉が、終らぬうち、きんと雲は、悟空をのせてぴゅーんとうき上り、まばたくうちに、すいれん

洞にかえりついた。

「おいおい、みんな、かえったぞ。」

すると、けらいの猿どもは、びっくりして、とび出して来た。

「あっ王様、どこからお帰りになりました、ちっとも気がつかず、失礼いたしました。」

「そうだろうとも、歩いてくるのがめんどうだから、空をすつとんできたからな、気のつかないのはあたりまえだ。」と悟空は大とくいである。

「ところで、るすのまに、なにかかわったことがあったか。」

「ありました、こんせいま王というやつが、すいれん洞をぶんどろうとして、兵をむけてよこすと云ってきました。いまにもここへやってくるかも知れません。」

「何、こんせいま王だと、そいつ、水れん洞をのつとろうとは、とんでもない、まっているのも、しゃくにさわる、こちらからおしかけて、こらしめてやろう、こんせいま王とかいったな、その生きなやつは、どこにいるのだ。」

「向うの山のほら穴にすんでいるときいています、風をおこし、雲にのることもできると云うおそろしいやつです。」

「なんの、おそろしいものか、雲にのるのは、悟空はまだだよ、ちょいと行って、こんせい魔王をやつつけてくる、きんと雲、こい。」

すると、ふわりと、雲がとんできた、その雲に、身をひるがえして、雲にのった悟空――。

「いけ、めざすわこんせい魔王のすむほら穴だ。」

びゅーん、びゅーうん、きんと雲は飛んで行った、一飛十萬八千里、光のようにとんで、あっと云うまに魔王のほら穴についたのである。

「でてこい、こんせい魔王、すいれん洞の王、孫悟空さまがまいつたぞ。」

門の前に仁王立ちになった悟空は、天へもとどけと、声をはりあげてどなりまくった。

「おう、孫悟空、こんせい魔王さまはこのおれよ。」

のっし、のっしとあらわれたのは、身のたけ三丈三尺もあるうと、思われる大男の怪物だ。それが六尺余の刀をふりあげて、いきなり悟空に切ってかかった。

「なんの力くらべなら、こっちものよ。」

悟空は、術をつかって、魔王にまけぬ程の大猿になった。ものすごいあらそいになったが、どちらも、負けずおとらずで、なかなか勝負がつかなかった。

「ええ、めんどうだ、術をつかってやれ。」

悟空が、自分の体の毛をむしりにとって、ふうっといきを吹っかけると、術の力で、一本一本の毛が、猿にかわって、大ざる小ざる、それはかぞえきれないさるの大群となって、わめきながら、こんせい魔王にとびかかって、ひっかいたり、くいっかいたり、

「わっ、ひっかくな、かじるな。」

こんせい魔王は、門の中へにげこもうとしたが、さるたちはにがさない。とうとう、魔王をたいじして、
「これでおしまいか、よわいやつだ。」

悟空は、さるどもをもとの毛にもどして、からだにつけ、きんと雲にとびのって、すいれん洞へもどった。

「王さま、ごぶじでおめでとうございました。」

「はっはっは、こんせい魔王など、あいてにもならないよ。たたかうなら、もうすこしつよいやつでなくてはつまらないな。」

魔王からぶんどった刀をなでながら、悟空は、けらいたちにじまんした。
(続く)

きれいな名栗川の大プール

七月下旬になると学校は夏休みにはいるので、どこでも子供会や、PTAが中心となって、夏のたのしみ行事として、山からは海へ、都会からは山へと計画さ

れて自然に親しみながら清遊されることは、青少年にとって本当によいことです。

そのような計画がこの名栗谷にも近年見られるようになって、夏休みを通じて、多くの団体のお客様が来られます。

名栗観世音センターでは、それらの方々のために特に夏休みの間、名栗川の自然の流れをせき止めて自然プールと云った水泳場を設けます。きれいな水が常に流れ込んでいますので、水底の石も、泳いでいる魚までが手にとるようにながめられて、それだけでもたのしいものです。団体や家族づれの人たちが水泳場は色とりどりの水着で日中は花が咲いたようにきれいです。

又センター北側の鱒釣場には沢山の鱒がいて、釣のだいごみを十分味えます。そして釣った鱒を其の場で塩焼きにして新鮮な味に舌鼓みを打つのも一興です。

お子様たちの遊び場としてはバズーカや、洋弓場、豆自動車場、大観覧車などがあってしばらくたのしむことができます。

センターの内部はご家族づれの場合は小部屋もありますし、団体の場合は大広間又は屋上なども利用されています。大広間には舞台もあって歌も踊りも自由出演で多くの方々の中には芸達者がおいでになりまし

て、入り交り立ち交りして時のたつのも忘れる程です。風呂も大風呂、小風呂とありまして、川にのぞんだ窓から山川の自然も見られてゆっくり温泉気分にあひたることが出来ます。

お泊りになることも出来まして、夜となれば川風が部屋に吹きこんで静けさの中に河鹿のなく声などもきかれて本当に別天地にきた心地がします。

夏の名栗観世音センターは夏の休みと共に多くの方々に利用され、そしてよろこばれるよう心からつとめて居ります。どうぞレジャーをここにお求めくださいませ。

流灯会と花火大会と盆踊り大会

名栗の盆は八月十三日の夜の魂迎えからはじまって十七日に終わります。鳥居観音では七月末日までに申し込みをうけた、物故者又は先祖代々を書いた灯ろうを十六日の午後観音堂に並べて供養をいたし、夕刻には全部の灯ろうを、センター北側の名栗川原に運んで流灯をします。灯ろうの中のろうそくに点ぜられた灯が流れるとき、まばたくように明るくなったかと思えばくらく、おごそかな御詠歌や読経の声と共に、静かな流れにうかんでくたはる様は壮観で、橋の上から、

川畔から、老若男女がこれをながめている姿や、数百の流灯がセンター下のプールの中にうかんで川面に映って居る風景は絵巻物のように非常に美しく皆恍惚として見とれて居ります。

丁度その頃からセンター下の川原から一発の花火が号報として、打ち上げられ、つづいてここかしこから大玉、小玉の花火が夏の中空に花を咲かせます。先程のしめやかだった流灯の気分から観衆は解放されたかのように歓声をあげ、どよめきの波がセンター前の広場に巻き起ります。

一番にぎやかで勇ましいのが電光雷です、ドンドン、ドンドン、そしてせん光と共にこだまが起る。

それから菊や柳の光はいろいろあつて涼しさを一そう涼しく、谷を明るくそめるのであります。

そして数台の仕かけ花火は川面を色どり実に見事な状景を画き出します。

空の花火に競うように鳥居観音前の広場に組み立てられた、やぐらから太鼓の音も地にひびくかのようにたたかれて、スピーカーからは、秩父音頭から地方民謡、歌に合せて踊りがくりひろげられます。

この踊りに参加する人々は、村内の同好の男女は勿論他地区からも灯ろう流し、花火大会の見物かたがた

飛び入りの人もいて、実にたのしいものであります。又センターに泊っている客も混じって初めての踊りでも一生けんめい習おうとする熱心の人もいてなごやかなものであります。

婦人会員、青年団員、小中学生、と云った人々が夏の夜のしかも盆の一夜をたのしもうとするとところに深い意義を見出すのです。

身ぶり手ぶりもおもしろく、そこには何の邪心もなく踊る人々にもいつか夏の夜の時は流れて、額の汗をそっとぬぐって息をつく時、世話係から各人にくばられた一本のアイスクャンデーこそ忘れられない味なのです。又来年を約してふけた夜道を淋しく家に帰る時、遠く山の彼方へ流れ星がして、盆の十六日も終るのであります。

夏の白雲山観音滝

七月になると、てりつける太陽に名栗も相当暑くなりますが、炭谷すみやいり入峽谷の観音滝は、本堂から歩いて五分ばかりのところにあります、高さ十米ばかりの水量のほうふな美しい滝で、夏にはかならず、ここを訪れる場所であります。

歩いた汗も、この滝のしぶきで冷え、全く夏を忘れ

ることが出来る仙境です、そして、この附近の峡谷はキャンプする人達でにぎわっております。

又白雲山境内に入ると、暑いと云つても参道の木陰は樹間を流れる風に、いつか汗も冷えてくる程です。

講のお知らせ

鳥居観音講も昭和四十一年十月発足以来おかげをもちまして大講といたしましては講員五百名をはじめ、三十二講を数え講員二千余名となりました。

この秋を迎えますと満二年となるので現在の状況で参りますと二千五百名に達し、年内には三千名に到達することと予想されます。

これも各地区の講元各位は勿論、心から協力くださいます信仰あつい方々のおかげでありまして心から感謝申し上げる次第でございます。

又その外に講に準ずる、鳥居観音の参拝団が各所に見うけられ、当山をにぎわしていただいております。

春から引つづいて秋に講中の団参を心からお待ちしております。

お願ひ

境内の草木は一本一本、心をこめて育て上げて今日から明日へと、何十年何百年の後々まで、観音様のお恵みと共に、参詣に登山される信者の方々の「よろこび」のためのものです、それを心ない人が、折つたり、又掘つて持つて帰つたりしてはいます、わずかな不心得者のため沢山の信者の方々に非常な迷惑と悲しみを与へて居ります。御来山の皆さんで、こんな不心得者は力を合せ撃退しようとして申し合せました。

そのような者を見受けられましたら、直ちに境内の寺務所なり、見回りの者に御連絡下さい。

流灯会のおすすめ

本年も盛大に流燈供養をいたします。皆様方の御先祖の御霊を、お慰め致すため是非流燈会へのお参加をおすすめ致します。御申込は鳥居観音寺務所へ

流燈会 八月十六日

申込期日 七月末日迄

流燈一基 二〇〇円より

鳥居観音のしおり 第七号

発行日 昭和四十三年七月一日 每号 定価 貳拾円

編集兼 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部 千三

発行人 浦和市仲町二一八一—一五 武州印刷株式会社

印刷所 鳥居観音 電話名栗(〇四二九七〇四) 五番

秋葉山

面白岩

→ 観音滝

琴比羅神社

三蔵塔

蛇の目半四阿

本堂

壇輪利四阿

梅月橋

緋曉之窓

鳥居文庫

名栗川

